



高松気象台によると、四国地方は6月8日に梅雨入り、6月27日に梅雨明け(ともに速報値)の19日間という統計開始後最も短い梅雨期間となり、期間を通した降水量は高松で68.5mm、多度津で82.0mmであり、本年の梅雨は空梅雨となりました。その後、7月8日以降香川県内でまとまった降水がありましたが、依然として乾燥状態が続いています。

また、気象庁発表の天候の見通しによると(7月22日発表時点)、9・10月は、平年と比べ、平均気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みとなっております。本年も記録的な猛暑日が観測されるなど、残暑も厳しく暑い日が続いています。作業中はこまめに水分・塩分を補給するなど体調

を整え、熱中症に注意しながら無理のない管理作業を行いましょ。

これから極早生温州ミカン収穫・出荷が始まる時期になりますが、収穫までまだ期間がある早生・普通温州ミカンや中晩柑類については、今後果実品質の低下をできる限り招かないよう、必要な対策を講じていきたいと思います。昨年は、10月以降も高温が続き、ハダニ類やアザミウマ類の被害が散見されました。本年も昨年同様に9月以降のハダニ類やアザミウマ類、果樹カメムシ類による被害が懸念されるため、収穫までの期間中に定期的に園地内を確認して、初期発生の中に薬剤防除を実施して高品質な果実生産に努めましょ。

1 温州ミカンの仕上げ摘果について

着果量が中庸以上の樹では早生温州ミカンでは9月中旬まで、普通温州ミカンでは10月上旬までに行いましょう。葉果比は、極早生は約20枚、早生・普通は約25枚を目安とし、また早生で新梢発生の少ない樹は約30

枚を目安としましょ。

(1) 着果過多樹

着果量が多く肥大が悪い樹は、内掘りや見落とし果、商品性の低い小玉果・傷果・病害虫被害果を中心に、早めの摘果を心掛けてください。

これにより、果実肥大を促し、次年産での安定した着花と適度な新梢の発生が期待できるようになります。

(2) 着果量がやや多い中庸の樹

8月下旬～9月に、着果過多樹と同様の果実を摘果して、適正葉果比となるようにします。

直立した結果枝に着果した大玉果などは、摘果することで果梗枝から新梢が発生し、残っている果実の品質が低下しやすいため、収穫前までの樹上選果で対応しましょ(写真1)。



写真1 直立した結果枝に着果した大玉果

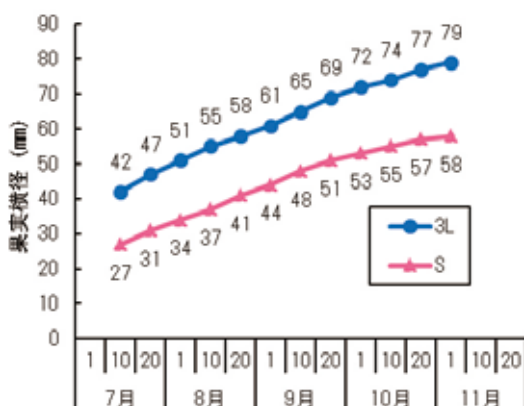


図1 早生温州ミカンの時期別果実横径の目安

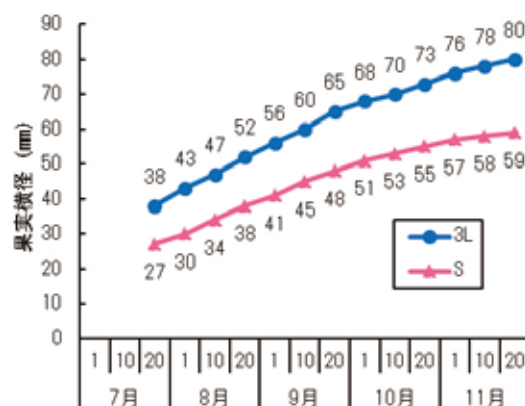


図2 普通温州ミカンの時期別果実横径の目安

また、樹冠上部摘果を実施している場合は、小玉果や着色の薄い内なり果などを重点的に摘果します。いずれも、商品性の高い中玉果を生産できるよう、肥大曲線を参考にし

果実肥大の状況を確認することも大切です(図1、2)。

(3) 不作樹

不作樹は夏秋梢の発生による過度な肥大や着色の遅れ、低糖度といった品質の低下を防ぐために、着果状況に依じて、摘果時期を遅らせて9月以降に仕上げ摘果を行うか、10月中旬以降に大玉果を中心に樹上選果をします。

(4) 後期重点摘果

前号でも触れましたが、後期重点摘果では、着果負担をかけておき、果皮が滑らかとなった秋季に目標の葉果比(約25枚)まで一気に仕上げ摘果を行うことで、着果負担を解除します。これにより、より多く作られた光合成産物が残した果実や地下部に運搬され、着色が早く、糖度の高い果実の生産が促され、翌年も着花しやすくなります。

果皮が滑らかになり、光沢が見られる9月中旬頃から、早生温州ミカンから熟期に応じて順に実施し、小玉果、内・裾なり果、果皮の粗い果実、枝に直接着果した上向き果・軸太果、傷果・病害虫被害果などを優先的に摘果します(写真2、3、4)。

しかし、この技術は仕上げ摘果の適期が短いことから実施できる面積に限りがあります。着果を多く残し



写真2 優先的に落とす果実
(枝に直接着いた上向き果)



写真3 優先的に落とす果実
(内なり果(小玉果))



写真4 優先的に落とす果実
(光沢がなく果皮が濃く 粗い果実)

ているため、仕上げ摘果が遅れると小玉となる上に、隔年結果が助長される場合もあるため、留意して実施しましょう。

2 中晩柑類の仕上げ摘果について

中晩柑類は、初期肥大が旺盛で、生育が進むにつれて肥大量が鈍化する傾向があります。そのため、着果量が適正以上に多かったり、摘果が遅れたりすると小玉の仕上がりとなります。まだ仕上げ摘果が完了していない場合は早めに取りかかり、大玉で品質の高い果実に仕上がるよう、内・裾なり果を見直すとともに、小玉果や傷果等を摘果しましょう。

3 品質向上対策

(1) マルチ栽培

マルチ栽培は糖度の上昇や着色促進に効果がある一方で、過度な土壌の乾燥により、酸高や小玉果となる場合があります。葉の状態や果実品質を確認しながら、少雨や全面マルチ等により過度な乾燥が続いている場合は、適宜かん水を実施します。小原紅早生では、9月中下旬のかん水により果実肥大と減酸を促し、その後は収穫時まで土壌の乾燥を促す管理が基本となります。

かん水の実施が難しい場合は、降雨前にマルチの巻き上げを行って雨水を入れます。反対に、多雨でマルチ

外からの雨水の流入があり、品質が低下している場合は、降雨がない時にマルチの巻き上げを行い、土壌の乾燥を促しましょう。

(2) 浮皮等の果皮障害対策

秋季に、高温多雨になると浮皮が、少雨になるとこはん症(ヤケ)が発生しやすくなります。こうした果皮障害の軽減を図るため、カンキツ類全般に、カルタスやセルバインなど水溶性カルシウムを複数回散布してください。また、温州ミカンの浮皮軽減として、不溶性のカルシウム(炭酸カルシウム)を主体としたクレフノンやクレントを散布する場合は、収穫1か月前(着色初期)から収穫前までの使用となりますが、果皮に白斑が残しやすいことに留意してください(表1)。

長期貯蔵を行う普通温州では、浮皮軽減のためジベレリンとジヤスモメート液剤を使用基準に従い混合して散布しましょう。ただし、使用時期は収穫予定日の3か月前までのため、12月上旬頃に収穫予定の場合、9月上旬までの散布が基本です。散布の1例としては、初めて使用する場合や、着色遅延が心配な場合は、9月上旬にジベレリン1~2ppm(ジベレリン液剤5000~25000倍)+ジヤスモメート液剤2000

表1 浮皮軽減を目的としたカルシウム剤の種類(温州ミカン)

区分	主成分名	商品名	希釈倍数	使用方法	備考
水溶性 カルシウム	硫酸カルシウム二水和物 ・塩化カルシウム	セルバイン 水溶剤	300	生理落果終了～着色期までに20～30日 間隔で2～3回散布	農薬
	ギ酸カルシウム	スイカル	500～ 1,000	開花後～収穫まで3～5回	特殊肥料 柑橘類登録
	キレートカルシウム	カルタス	300～ 1,000	果実肥大期3回以上	特殊肥料 柑橘類登録
不溶性 カルシウム	炭酸カルシウム	クレフノン	100	収穫1か月前から収穫直前までの間に 1回散布	農薬、 汚れ注意
		クレント	100～ 200	着色初期から収穫直前（2回以内）	農薬

倍と低濃度の散布としてください。

散布濃度が濃いほど効果は期待できますが、その一方で着色遅延が起これやすくなるため留意してください。また、9月中であれば上旬より下旬の散布の方がより効果が出やすくなりますが、着色遅延も起こりやすくなります。

また他の温州ミカンでの浮皮軽減対策として、新葉が発生した樹勢の良い樹においては、蜜尻期にフィガロン乳剤(3000倍)を2週間間隔で2回散布する方法もあります。ただし、根の活動を阻害することから樹勢の低下を招くため、樹勢の弱い樹での使用は控えましょう。

4 中晩柑類の施肥

初秋肥(9月上旬頃)を、樹勢の維持と果実肥大の促進、貯蔵性の向上を目的に施用します。また、不知火で問題となりやすいこはん症(ヤケ)は、初秋肥を施用することで発生が軽減されます。

5 かん水

温州ミカンの糖度上昇のためには、夏秋季の乾燥は好ましい状況ですが、土壌の乾燥が長期に及ぶと果実の肥大や減酸が抑制され、キク症状や樹勢の低下も招きます。このため、9月上旬までに糖度が確保できている場合は、9月中下旬にかん水

を実施し、果実肥大や減酸を促しましょう。特に、朝でも葉が巻いた状態から直らないような過度な乾燥状態になっている場合は、速やかにかん水を行いましう(写真5)。



写真5 過乾燥により葉が黄化し巻いている様子

中晩柑類は、夏秋季に降雨が少ないと、酸高や小玉果となりやすく、特に不知火では、こはん症(ヤケ)が発生しやすく、樹勢が低下に繋がります。このため、降雨が少ない場合は、定期的なかん水実施してください。

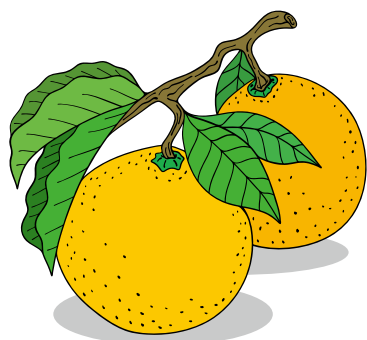
6 夏秋梢の処理

着果量の少ない樹では、夏秋梢が多く発生しますが、気温が下がって秋芽が発生しにくくなる10月中旬頃以降、各品目での目的に沿って夏秋梢の処理を行います。

温州ミカンでは、翌年の着花量減少と新梢の確保を目的に夏秋梢の処

理を行います。直立した強い徒長枝は樹形を乱すため、基部から間引きます。また、斜め上から横向きの夏秋梢は、春枝と夏枝の境目の上で切り返し、長大な枝は、先端の葉1～2葉を残して他の葉を全摘葉します。

中晩柑類では、果実肥大の促進やかいよう病被害の軽減、翌年春の充実した春芽の確保を目的に行います。温州ミカンと同様に、直立した強い徒長枝は樹形を乱すため、基部から間引き、弱く発生が遅い夏秋枝は節の下で切り返します。かいよう病にかかりやすい病害虫被害枝は除去します。





JA香川県
東讃営農センター
土庄集荷場
担当 土居 和馬

ビワは、これから出蕾が始まり、令和7年産の花の多少を確認することが出来ます。着蕾の様子を確認しながら、軽いせん定や摘房により花数を調整しましょう。

梅雨明けから降雨が非常に少なく、高温乾燥傾向で推移しましたので、旧葉の落葉も見られ、樹勢が低下している園地もありました。葉数の少ない樹は、早めの摘房などにより着蕾数を制限して樹勢の回復を図りましょう。また、寒害対策としての摘房や秋肥の施肥など次年産に向けて好調なスタートが切れるよう管理作業に努めて下さい。

1 秋肥の施用

ビワは9月になると花芽分化がほぼ終了し、出蕾が始まります。その後の枝葉の充実や開花・結実に必要な養分をまかなうことを目的に9月上旬～中旬にかけて秋肥を施用します。

秋肥の施肥量は年間で最も多く、生育を左右する重要な施肥です。肥料が多いと枝の伸長が活発になり、

葉も大きくなりますが、過繁茂となり、内部に日光が入らなくなります。一方、肥料が少ないと葉や結果枝が弱くなり、生育不良になってしまいます。施用量の目安は、10aあたり窒素量で10kg程度です(樹齢20年の樹を想定)(表1)。現在の樹の状態や今年の果実品質、土壌条件を考慮して施用量を加減します。

表1 香川県におけるびわ園時期別成分割合および施肥量
(10a当たり、%、kg)

三要素 施肥期	窒素		リン酸		カリ	
	割合	施肥量	割合	施肥量	割合	施肥量
秋肥 (9月上旬～中旬)	40	10.0	40	12.0	40	8.0
年間施肥量	100	25.0	100	30.0	100	20.0

2 土壌改良

また、堆肥を長らく施用していない園地では土中の腐食成分が不足しており、施用した肥料をびわが活用できないので堆肥の施用もお願いいたします。

ビワの生育に好適なpHは5.5～6.0ですが、土壌のpHが酸性に傾くと無機養分の吸収が悪くなるので、苦土石灰等を土壌に混和し、適正な範囲を維持します。石灰の施用は根の活動が停滞している9月中旬までに行いましょう。この施用を秋肥と同時にを行うと窒素の肥効が低下してしまうので、2週間程度の間隔を開けるようにします。

また、敷きワラや敷き草は、温度変化や乾燥といった土壌表面の環境変動を緩和し、ビワの根を保護するのに効果的です。ただし、排水の悪い園地では効果が少なく、根元まで敷くと紋羽病の発生を助長し、生育を悪くすることがあります。排水の良い園地でも幹の周りは少し開けて敷きましょう。

3 摘房

摘房には、次年産の結果枝を確保することによる隔年結果の防止や、房数を制限して幼果の肥大を促進するといった目的があります。

摘房は、花房が生育し、小果梗がば



写真1 摘房適期の花房(○の頃が適期)

らつき始める10月上旬～中旬に行います(写真1)。最終的には、着果枝と未着果枝がほぼ同数になるようにします。

寒害の心配のない園地では、葉が少ない枝や副梢の花房を落とし、果実が肥大しやすい中心枝や充実した果痕枝の花房を残します。

寒害を受けやすい園地では、生育の早い花房を落とし、被害を受けにくい樹冠内部の花房や開花が遅い花房を残すことで寒害を回避しましょう。また、中心枝や果痕枝より開花期が遅い副梢を残すことで寒害被害を軽減することもできます。

4 摘蕾

ビワの花は一花房に多くの花を着けるので、摘蕾で花数を制限するこ

とで残した果実の肥大を促進することができず。また、開花期間を長くすることで寒害の回避も期待できません。

摘蕾は、花梗枝が伸長し、花房の側軸がはっきり分離する10月上旬～中旬に行います(写真2)。「茂木」などの小花梗が上向きに着生し、一房に2～4果を着果させる品種では、花房の中央部の3～4段を残し、他の小花梗を全て切除します。こうすることで、房内の果実品質が揃いやすく、袋もかけやすくなります。「田中」などの小花梗が横から下向きに着生し、大玉で一房に1～2果を着果させる品種では基部近くの充実した小花梗を2段残し、他の小花梗を切除



写真2 早期摘蕾の様子

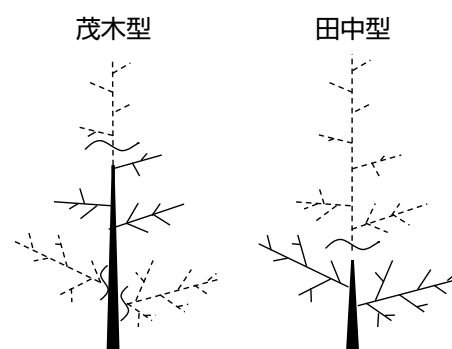


図1 摘蕾の様子

します(図1)。

寒害を回避する目的で摘蕾を実施する場合は、時期が遅くならないように注意して花房の長さが3～5cmで側軸が伸長し始めた時期に行います。早期に摘蕾を行うことで本来なら開花せずに脱落する遅咲きの花が開花し、開花期間が長くなることで寒害が軽減されます。

5 病害虫防除

ビワにとって最も被害が大きい病害はがんしゅ病です。本病害の枝での感受性は9月が高いといわれており、降雨が多い場合には無機銅水和剤(コサイド3000など)やカスガマイシン・銅水和剤(カスミンボルドー)を散布します。また、ナシヒメシンクイなどの害虫の食害痕からがんしゅ病が拡大することがあります。

す。そのため、ナシヒメシンクイなどを対象とした防除はカルタップ水溶剤(パダンSG水溶剤など)を散布します。

9月になると、これまで休眠していたビワキジラミの成虫が産卵を開始し、幼虫が増加します。ビワキジラミは発生が多発すると駆除が難しく、近隣圃場にも飛来し食害被害を及ぼすことが懸念されるので、アブラムシ類の防除をかねてマラソン乳剤などを散布しましょう。



1 本年産概況

本年産のモモの状況としましては、6月27日での早期の梅雨明け(高松気象台より)が影響し、出荷最盛期が10日以上遅延し、雨不足と高温による果皮の色づき不足や、果実肥大は、全体的に小玉傾向でした。出荷は、8月中旬での出荷終了となり、出荷量は昨年度の不作状況から回復し、一昨年並みの出荷量となりました。

販売についても、7月20日以降お中元のギフト商戦が過ぎてしまい単価が下がりましたが、一昨年並みの販売高となりました。

2 収穫後の管理

(1) 礼肥・基肥

収穫後においては、葉の活性を高めて貯蔵養分の蓄積を促し、来年度の花芽や葉芽の充実を図る礼肥を施用しましょう。

樹勢が強い樹に施用すると秋伸びを助長し、逆に貯蔵養分の浪費や花芽などの充実不良を招きます。施用は収穫後の時点で、葉色が薄く、新梢

表1 (参考) 中生・晩生モモ園時期別施肥成分割合および施肥

(10a当たり、%、kg)

施肥期	三要素		窒素		リン酸		カリ	
	割合	施肥量	割合	施肥量	割合	施肥量	割合	施肥量
基肥 (10月中下旬)	75	10.8	84	12.6	62	9.0		
追肥 (5~6月)	0	0.0	0	0.0	17	2.5		
礼肥 (7~8月)	25	3.6	16	2.4	21	3.0		
年間施肥量	100	14.4	100	15.0	100	14.5		

の伸びが停止した樹勢が落ちてきている樹に施用してください。また施肥量は、年間施肥量の2~3割を目安に速効性肥料などを施用してください。時期としては収穫後なるべく早く施用すると効果が高いため、まだ施用していない場合は、早く実施しましょう。

基肥は年間施肥量の6~8割を目安とします。肥料の遅効による新梢の二次伸長を防ぐため、10月中下旬を目処に施用しましょう。(表1)

(2) 秋せん定

秋せん定によって枝を切ると、葉数が減ることにより貯蔵養分の蓄積を抑制でき、翌年の徒長枝の発生が抑えられるとともに、冬季のせん定量も減らすことができます。

枝の混み合った状態を放置すると、樹冠内の日照が不足し、翌年の花芽の充実不良を招きます。そのため秋季せん定で枝を除き、樹冠下の明るさを確保するとともに、新梢の伸長が停止した9月中旬頃に、生育が旺盛な新梢や重なり枝などで日影ができてい部分を中心に行いましょう。(写真1)実施時期が早すぎると新梢が二次伸長し、遅れると養分の蓄積が進むため樹勢を抑える効果や切り口の癒合が悪くなります。

強樹勢の樹では秋せん定を積



写真1 秋せん定を行う樹(赤の範囲内をせん定し整える)

極的に実施し、樹勢を落ち着かせましょう。逆に、老木樹など樹勢の弱い樹では更なる樹勢の低下を招く恐れがあるため行わないようにしましょう。

(3) 病害虫防除

本年度は、6月・7月における降水量がかなり少なく、温度も7月の月間の平均気温が30.3度(高松気象台より)と過去例にない高温で推移しております。収穫後の病害虫防除によってモモの園全体の保護を行うっていくことで次年度に向けた準備にもつながりますので、(表2)を参考に防除を行ってください。

表2 病害虫防除

散布時期		病害虫名	基 幹 防 除				
早生種	中生・晩生種		薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期 (収穫前日数) ／使用回数	10a 当たり 散布量
9月上旬		カイガラムシ類	コルト顆粒水和剤	2,000倍	50g	前日／3回	500ℓ
9月中旬		コ ス カ シ バ	トラサイドA乳剤	200倍	500ml	収穫後～発芽前 (幼虫食入期)／1回	
9月下旬～10月中旬 (落葉前までに)		せん孔細菌病	ICボルドー412	30倍	3.3ℓ	—／—	500ℓ



写真1 縮果症

1 本年産概況
 今年の梅雨期は、6／8～6／27の約20日間と過去最も短い梅雨、最も早い梅雨明けとなりました。
 6月の降水量は平年と比較し上旬はかなり多く、中旬・下旬は少なく、梅雨時期としては降水量少なめとなりました。
 梅雨明け後、急激に夏の天候となったため、生理障害では日射症や縮果症(写真1)が発生しました。
 虫害ではカイガラムシ(写真2)の発生が多く見られます。カイガラムシについては冬～春に行う粗皮削りとスタークル顆粒水溶剤の樹幹塗布の合わせ技が大変有効ですので、必ず実施するとともに、発生場所を把



写真2 カイガラムシ
(赤丸の中)

握するために発生している場所(袋や葉にススがついている所)に目印をつけておき、目印をつけた部分の枝の粗皮削りを冬期せん定後実施しましょう。
 「スタークル塗布を行ってもカイガラムシが発生している」という生産者がいらつしやいますが、塗布を行うことによって確実に発生数を減らせていますので塗布は毎年継続して行いましょう。
 トンネル栽培ではこれから収穫時期を迎えます。シャインマスカットでは、収穫前の糖度検査・食味の確認を必ず行いましょう。糖度基準は、肩部18度以上もしくは房先17度以上です。収穫時には穂軸を持ち、未熟果(石ぶどう)や小粒果が混在していないかを十分に確認して下さい。また、果粉(ブルーム)が落ちないよう、果粒には極力触れずに作業を行って下さい。荷造り時も脱粒に注意し、異物



混入や病害虫被害果がないかを丁寧に確認しましょう。

また、産地などによっては、房の上部に糖度検査用の果粒を残して房づくりを行っている事例があります。が、検査用の果粒は出荷時に必ず除去して下さい。定められた出荷要領を遵守し、高品質果実の生産出荷に努めましょう。

収穫が終わると本年産の作業はひと段落しますが、同時に翌年産への準備スタートでもあります。収穫後の栽培管理を徹底するとともに、土壌改良対策などにも積極的に取り組みましょう。

2 収穫後の管理

翌年の発芽・生育初期は、前年の貯蔵養分で成長します。このため、収穫後から落葉するまでに、十分な養分を蓄積させておくことが大切です。生育旺盛な園地では収穫後も副梢が発生し、その伸長に養分を浪費するため、基から除去して下さい。また、健全な樹体では、10月中旬まで光合成が行われ、11月～12月に落葉します。水不足や病害虫被害等で早期落葉すると翌年のための貯蔵養分が十分に蓄積できないため、収穫後から11月上旬まで土壌が乾燥する場合には適宜かん水を行いましょう。

表1 ブドウ年間施肥成分基準(kg/10a)

樹 齢	ピオーネ				シャインマスカット			
	収量 (kg)	施肥成分量 (kg)			収量 (kg)	施肥成分量 (kg)		
		窒 素	リン酸	加 里		窒 素	リン酸	加 里
4	500	4.0	4.0	4.0	500	4.0	4.0	4.0
5	1,000	6.0	6.0	6.0	1,000	8.4	8.6	7.0
成 木	1,500	8.4	8.6	7.0	1,500	11.2	11.4	9.3

※果樹園の施肥基準と施肥設計例(香川県果樹研究同志会)より引用

3 基肥

基肥の施用は、着果負担によって疲弊した樹勢の回復と翌年度のための貯蔵養分の蓄積につながります。収穫後、10月中旬までに行うようにして下さい。施肥が遅れると地温が低くなるため、根の養分吸収が劣ります。また、施肥後はかん水を行います。肥効を高めましょう。施肥量については、年間施肥基準(表1)を参考にしますが、園地の土壌状態などを考慮し調節して下さい。なお、徒長的な生育を抑えるために、幼木では窒素過多に注意しましょう。

4 土壌改良

(1) 化学性の改善

まずは、土壌診断により、自園の土壌の状態を把握することが大切です。土壌成分量は目には見えないことから、特に長期間土壌診断を行っていない園地では、実施を検討して下さい。化学性の主要項目であるpH、ECの適正値は、pHが6〜7、ECが0.1〜0.3です。化学性の改善は、単年度ではなく、長期的に継続して行うことで効果を発揮します。

近年、施設栽培を中心に土壌pHが高い園地や肥料成分が過剰となっている園地が散見されます。土壌pHが高い園地では苦土石灰の施用は

しばらく避けましょう。一方、土壌pHが低い園地では、サンライムまたは苦土石灰などを10a当たり100kg程度施用します。なお、元肥の施用から2週間以上間隔を空けて下さい。

(2) 物理性の改善

排水対策等には部分深耕が有効ですが、細根を切断することとなるため、秋根が再発生する9月〜10月上旬に行いましょう。また、一度に多量の細根を切断すると樹勢が低下する恐れがあるため、1年後ごとに場所

を変えながら数年かけて行なって下さい。部分深耕の一例として、タコツボ深耕を紹介します(図1)。主幹から2mほど離れた位置に、直径30〜50cm、深さ30cmほどの穴を掘り、完熟堆肥を混ぜて埋め戻して下さい。これを1樹当たり4カ所程度、間隔を空けて行います。翌年には、場所をずらして同様に処理を行い、複数年で樹冠周囲を一周することで、樹体への影響は少ないうえで、土壌の物理性を改善することができます。

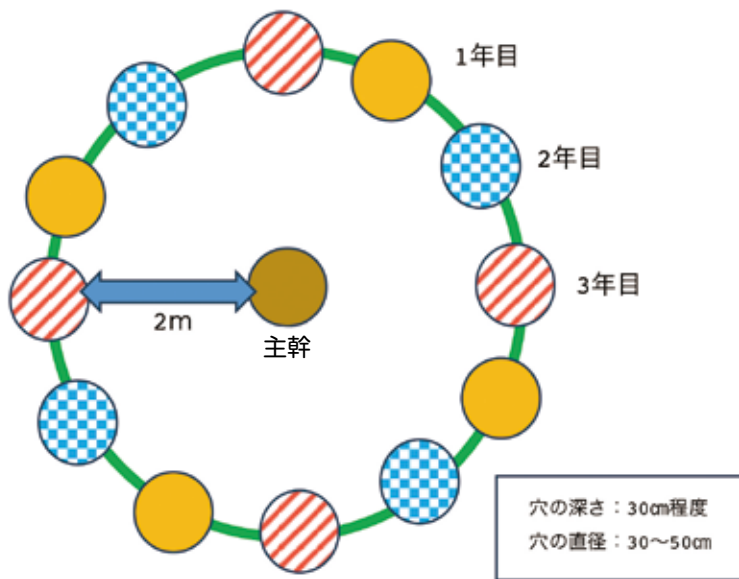


図1 タコツボ深耕の実施例



写真1 隣接している果実の摘果

本年は着果量が多く、平年と比べ梅雨以降の降水量が少ないため、果実肥大に影響が出る懸念があります。適度な灌水と摘果をしっかりと行いましょう。カメムシの発生はしばらく見られませんが、カイガラムシが多く発生しており、炭疽病なども散見されております。見直し摘果時には日焼け果や傷果、病害虫被害果を優先して摘果しましょう。

1 生育状況



写真2 夏秋枝の処理の方法

左：発生時期が遅く、黄色い葉で弱い枝となっています。このような場合は下側の春枝との境の上側で切り取ります。

右：緑化の完了した強勢な夏枝は、枝の充実した部分や成葉となっている部分で切り返します。(枝先を引っ張って曲げてみると枝の不充実・充実部分との境付近で曲がります)あるいは葉を数枚残して切り返します。

3 新梢管理

日焼け果や傷果、病害虫被害果は摘果します。果実の向きと日当たりに注意し、日焼け果、病害虫被害果の見逃しがないように確認しましょう。果実が隣接していたり、枝に挟まれていたりする場合は傷果となり、病気の発生やカイガラムシ等の発生を助長しますので、今後の玉肥大を考慮して摘果します(写真1)。

2 見直し摘果

この時期の新梢管理も玉肥大に影響してきます。二次伸長した夏枝・秋枝を放置しておくと、日当たりが悪くなり、夏枝・秋枝に養分が費やされるため玉肥大が抑制されます。さらに、9月～10月は秋雨や台風によって曇天になりやすく、病害虫が発生しやすい環境になるので、風通しをよくして病害虫の発生を抑制しましょう。また、越冬病害虫の抑制にもつながります。二次伸長した枝は二



写真3 新梢の誘引



写真4 枝を支えるための支柱

次伸長部分と春枝との境の上側で切りましょう(写真2)。早秋の二次伸長した枝は炭疽病にかかりやすいため、早目に除去しておきましょう。

4 誘引・枝つり

果実肥大に伴い、枝が垂れ下がってきます。枝折れが懸念される場合は日当たり、枝折れ、農薬のかかりやすさを考慮して誘引や枝つり、支柱をします(写真3、4)。



写真5 炭疽病に感染した枝



写真6 炭疽病に感染した果実

5 病害虫防除

秋雨、台風による炭疽病(写真5、6)の発生が懸念されます。病害虫防除の際には、混んでいる部分の枝を落とし、薬剤がしっかりとかかるようにしましょう。伝染源となる被害枝や被害果は見つけ次第除去して、園地内に放置せず適正に処分して下さい。防除は基本的に9月で終える方が多いと思いますが、病害虫の発生状況を考慮して追加防除も検討しましょう。収穫期に防除を行う場合、農

薬の収穫前日数を必ず確認して散布して下さい。

6 収穫

太秋や早秋等の早生柿は9月中下旬から収穫期を迎えます。収穫が始まる頃は、果実の色づきもまばらですので色回りが良い果実から収穫していきます。しかし、近年異常気象や晴れ間が続く影響で果実が焼けて色回りが早くなる焼け熟れが目立ちます。早生柿の出荷の際はしっかりと食味をしてから出荷するようにしましょう。また、収穫時は果梗を短く切りなおし、収穫かご、出荷コンテナに果実を移します。傷がつかないように丁寧に扱きましょう。さらに、結露や雨等で濡れた果実は扇風機で乾かします。



1 生育状況

本年は梅雨明けが平年より20日程早かったため、かん水開始時期がいつもよりかなり早かったと思います。さらに、梅雨明け後、急激に高温乾燥となったため、樹勢の低下している樹などでは早くから葉焼けが見られました。キウイフルーツは、極端な気象の変化に対応するのが難しい品目ですので、樹勢を適切に保ち、各園地に応じたかん水管理を徹底しましょう。

2 枝管理

枝の伸長は9月頃も続きます。樹勢の維持や品質向上のためにも、棚下に木漏れ日が射す程度の適切な明るさを常に維持しましょう。

ただし、高温乾燥状態が続く場合は、明るくなりすぎないように注意しましょう。

3 かん水管理

収穫前は、緩やかな乾燥状態を維持することで、果実の収穫前肥大を抑制するとともに、窒素の遅効きと秋梢の発生を防止することで、果実

品質の向上が期待できます。

ただし、近年は9月も高温乾燥となることが多いため、乾燥しすぎないように注意が必要です。

4 台風対策

台風シーズンとなりますので、防風ネットや棚を見回り、補強や修繕、排水路の点検や傾斜のある園地内に水筋をつけないよう園地上部の排水対策を行います。台風通過後は、果実軟腐病の防除を忘れずに行いましょう。

また、台風対策は品種の選定も重要になります。風あたりの強い場所には、風に弱い「香緑」や「ハイワード」などは避け、比較的葉や枝が頑丈な「さぬきゴールド」、「さぬきエメラルド」や「さぬきキウイっこ」などを選びましょう。

5 収穫

(1) 収穫適期

収穫適期は、収穫時の果実硬度、糖度、果肉色や成熟日数、開花後の積算温度、非破壊糖度センサーによる予測糖度調査等から判断します。

「さぬきゴールド」や「さぬきエンジェルスイート」、「さぬきエメラルド」は等級区分のために実施する果実分析結果をもとに区分収穫しましょう。また、特に黄色系品種では、収穫適期より早く収穫した場合や落



早期収穫



適期収穫

図1 収穫時のさぬきゴールドの果肉色

葉が多い園地では、果肉に緑色が残ることがあるので注意が必要です(図1)。

近年は、夏秋季の高温により、収穫時期が早まる傾向にあります。収穫適期から逆算して除袋し、果実軟腐病の防除を行います。

(2) 収穫方法

収穫は、果実温度の低い午前中の早い時間に行います。果実表面は毛じが長く抜けやすい品種や、毛じが少なく傷つきやすい品種があるため、丁寧に取り扱いします。果梗が果実に残ると、果実同士で傷が生じやすいため取り除きます。

6 貯蔵

低温(5℃)における貯蔵性は、黄色系品種で短く1〜2ヶ月程度、緑色系品種で5〜6ヶ月程度です。

貯蔵の1ロットは大きくせず、1コンテナ15kg程度にします。果実を何段も重ねるとコンテナ中央の果実温度が上昇しやすいので、できるだけ平坦に並べます。「さぬきゴールド」のように大きく軟らかい果実は、重みにより変形するため注意が必要です。

ポリエチレンフィルムは0.03mm厚を使用します。フィルムが厚いと貯蔵中の結露が多くなり果実の腐敗が発生しやすくなります。底面と上面には新聞紙を載せて結露が果実に直接触れないようにします(図2)。



図2 コンテナ貯蔵の様子

7 追熟

また、軟化した果実や傷がある果実が混入しないよう気を付けます。長期貯蔵では、エチレン吸着剤を封入し、定期的に空気の入れ替えを行うとともに、果実軟腐病やシワ果の発生を確認して取り除きます。

キウイフルーツの果実はそのままでは追熟しません。エチレン処理をしなくても果実は軟化しますが、果心が硬く減酸が遅くなることから、品種本来の食味にならない場合があります(図3)。



エチレン処理果実
(果心が軟らかい)



エチレン無処理果実
(果心が硬い)

図3 エチレン処理の有無による果心の硬さ

追熟にはエチレングスまたは市販の追熟剤を利用します。エチレン処理は温度15〜20℃、100ppm以上の濃度で24時間処理します。

可食適期までの追熟期間は、黄色系品種で短く7〜10日程度、緑色系品種で長く14日程度です。追熟期間は収穫直後が最も長く、貯蔵が長くなるにつれて追熟期間は短くなります。

8 病虫害防除

香緑・ヘイワード・讃緑

月	旬	基 幹 防 除						応 急 防 除					
		対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ 当たりの 薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ 当たりの 薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量
9	上							キウイヒメヨコバイ カメムシ類 キイロマイコガ	㊟アグロスリン乳剤	2,000倍	50mℓ	7日、3回	400ℓ
	中							果実軟腐病 (降雨が多い場合)	トップジンM 水和剤	1,000倍	100g	前日、5回	
	下							カメムシ類 (発生時)	スタークル 顆粒水溶剤	2,000倍	50g	前日、3回	
10	上												400ℓ
	中							クワシロカイガラムシ	コルト顆粒 水和剤	3,000倍	33g	前日、3回	
	下	貯蔵病害 (灰色かび病) (収穫期 除袋後)	ストロビードライ フロアブル	2,000倍	50g	前日、3回	400ℓ						
11	上												
	中												
	下												

さめきゴールド

月	旬	基 幹 防 除						応 急 防 除					
		対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ 当たりの 薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ 当たりの 薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量
9	上												
	中							果実軟腐病 (降雨が多い場合)	トップジンM 水和剤	1,000倍	100g	前日、5回	400ℓ
	下	貯蔵病害 (灰色かび病) (収穫期 除袋後)	ストロビードライ フロアブル	2,000倍	50g	前日、3回	400ℓ	カメムシ類 (発生時)	スタークル 顆粒水溶剤	2,000倍	50g	前日、3回	
10	上												
	中							クワシロカイガラムシ	コルト顆粒 水和剤	3,000倍	33g	前日、3回	
	下												

さめきエンジェルスイート・さめきエメラルド

月	旬	基 幹 防 除						応 急 防 除					
		対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ 当たりの 薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ 当たりの 薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量
9	上							キウイヒメヨコバイ カメムシ類 キイロマイコガ	㊟アグロスリン乳剤	2,000倍	50mℓ	7日、3回	400ℓ
	中							果実軟腐病 (降雨が多い場合)	トップジンM 水和剤	1,000倍	100g	前日、5回	
	下							カメムシ類 (発生時)	スタークル 顆粒水溶剤	2,000倍	50g	前日、3回	
10	上	貯蔵病害 (灰色かび病) (収穫期 除袋後)	ストロビードライ フロアブル	2,000倍	50g	前日、3回	400ℓ						400ℓ
	中							クワシロカイガラムシ	コルト顆粒 水和剤	3,000倍	33g	前日、3回	
	下												

※赤字は昨年度からの変更点



はじめに

農薬の登録内容は随時更新されているため、使用時期や回数、希釈倍数等については使用前にラベル等で確認しましょう。また、農薬散布の際には、近接園地の栽培作物、学校などの公共施設や住宅地等に農薬が飛散しないよう細心の注意を払いましょう。

果樹共通

Ⅰ 果樹カメムシ類

果樹を加害するカメムシ類の被害は、吸汁された部分がスポンジ状になってくぼみを生じ、商品価値を大きく損ないます。8月以降では主に当年成虫(新成虫)により加害され、カキ(写真1)、キウイフルーツ(写真2)、カンキツ類が被害を受けます。越冬成虫を中心とした平年の発生ピークは6月中旬～7月上旬(図1:黒点線)で、新成虫を中心とした平年

の発生ピークは7月下旬～8月上旬(図1:黒点線)にあり、成虫の寿命は1年程度と長く、被害は10月頃まで続きます。

2025年は多発生した2024年の状況とは異なり、4月中旬以降の果樹カメムシ類の誘殺は平年よ



写真1 カキのカメムシ吸汁被害

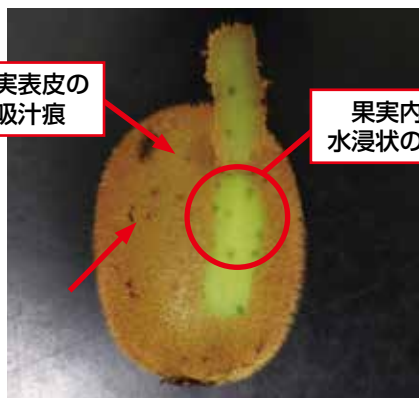


写真2 キウイフルーツのカメムシ吸汁被害

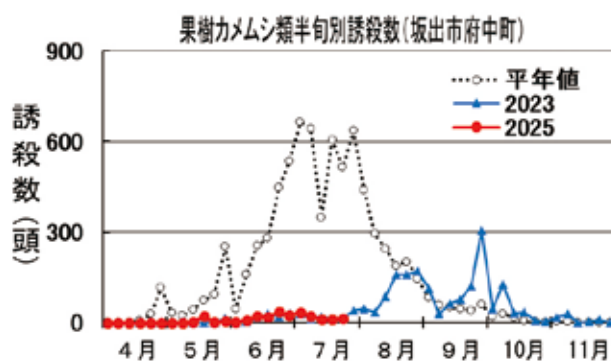


図1 数値はチャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサガカメムシ、アオクサカメムシの合計値

りもやや少く並で推移しており、越冬世代成虫の発生は平年と比べ、やや少ない発生でした。(図1:赤線)しかし、果樹カメムシ類の産卵に必要なヒノキの球果量について県内16地点で調査した結果、球果量はやや多い状況でした。このため、8月以降の新成虫の発生量が2024年の越冬成虫の多発生をもたらせた2023年の状況(図1:青線)と同様に多くなる可能性がありますので、新成虫の果樹園への飛来に注意しましょう。病害虫防除所が発表している病害虫発生予察情報を参考に今後

の発生動向に注意してください。

カンキツ

Ⅰ 黒点病

秋期に雨が多いと、着色期になっても黒点の周囲に緑色が残る後期感染が多くなる可能性があります。生育期間中の黒点病防除を徹底してください。9月に秋雨が多く防除が必要な場合は、ナティーボフロアブル(収穫前日/3回)を散布してください。なお、マンゼブ水和剤(ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤)は、温州ミカンでは散布後30日間、せとかや不知火などの中晩柑類では散布後90日間は収穫できませんので、収穫時期に注意して薬剤散布を行ってください。

Ⅱ 青かび病・緑かび病(写真3)

病原菌は圃場内の土壌中で越冬し、秋頃から空気中に胞子を飛散し始めます。果実に傷があるとそこから進入し、多くは貯蔵中や輸送中に腐敗します。収穫前にトップジンM水和剤の単剤散布またはベルコートフロアブルとの混用散布を行ってください。缺傷や果実の引きもぎ傷、運搬中の圧迫傷は発病を多くする最大の要因なので果実は丁寧に扱います。



写真4 ミカンサビダニの被害

夏期に高温少雨が続く場合には短期で増殖し、被害をもたらす場合があります。過去に本害虫による被害が発生した園地では特に注意が必要です。8～9月に茶褐色または黒褐色の果実(写真4)がみられる場合には、す

3 ミカンサビダニ



写真3 緑かび病

に園地全体の密度が高まっているものと考えられます。このとき、症状のひどい果実での寄生密度は低くなっていますが、他の果実や葉では高密度になっており、放置すると越冬密度が高くなり翌年産の多発要因ともなります。ミカンサビダニは10月上旬までに越冬部位である芽のりん片の隙間に移動するため、それまでに防除を徹底してください。

● ビワ

1 ビワキジラミ

2016年に県内での発生を確認以降、県内全域に発生が拡大しています。7月中旬から8月の高温期には成虫がビワ樹の樹幹内部の日陰に隠れて休眠状態になるため、枝先の葉上ではほとんど見られません。しかし、9月にビワの花蕾形成が始まると活動が活発になり、枝先に集まって交尾し、花蕾に産卵を始めます。9月下旬頃から幼虫が、10月下旬からは新成虫が花蕾で見られるようになります。

ビワキジラミの密度が高くなると、すす病(写真5)が発生します。すす病はビワキジラミの排泄物(甘露)を栄養源としてカビが繁殖し、葉や果実の表面が黒く汚染されます。す



写真5 ビワキジラミの寄生によってすす病が発生した花蕾

す病の発生や葉裏に寄生した成虫を目印として、早期発見に努め、圃場内での発生を確認した場合は馬拉ソン乳剤などを散布してください。なお、スタークル(アルバリン)顆粒水溶液は夏～秋に散布するとリサージェンス(農薬散布により害虫とともに天敵も減り、害虫が散布前よりもかえって多くなること)を起こすことが確認されているため、3月の袋掛け前に散布しましょう。また、花芽基部などの隙間に隠れている幼虫には薬剤がかりにくいいため、まくびかなどの濡れ性(湿展性)を高める機展性展着剤を加用し、丁寧に散布するようにしましょう。

● モモ

1 せん孔細菌病(写真6)

7月末までの発生量は平年並に経過していますが、今後、秋雨期の降水量が多い場合や、台風被害に遭うと、9～10月に病原細菌が新梢の芽に感染し、翌春の開花期頃から春型枝病斑を生じ伝染源となり、翌年の被害が多くなる可能性があります。次年度の発生を減らすためにも収穫後のICボルドー412などの無機銅剤による防除は必ず行い、多発園では2回散布しましょう。

2 コスカシバ

成虫の発生は6月と9月に多くなります。卵は主幹部の樹皮の裂け目



写真6 せん孔細菌病



写真7 コスカシバによるヤニ

などに産み付けられ、ふ化幼虫は木くずの混じったヤニ(写真7)を樹体外に排出しながら形成層を食害します。樹皮を削り、幼虫を捕殺するとともに、9月中旬に枝幹部全体にトラサイドA乳剤を丁寧に散布しましょう。

カキ

1 炭疽病(写真8)

台風通過による強風雨や秋雨期の降水量が多い場合には、9月上旬頃までに確認防除を行う必要があります。また、伝染源となる被害枝や被害果は見つけ次第除去して、圃場内に放置せず土中に埋没するなど適正に処分してください。近年、県内でもトップジンM水和剤やベンレート水和剤等のベンゾイミダゾール系剤で



写真8 炭疽病の果実被害

耐性菌の発生が確認されていますので、これらの剤を使用したにもかかわらず炭疽病の発生が多い圃場では、ニマイバー水和剤やストロビードライフロアブルなどの薬剤に切り替えて散布するようにしてください。

ブドウ

1 べと病(写真9)

この病害は新しく柔らかい組織に発生しやすく、古くて硬い組織にはあまり発生しません。台風が通過したり、秋雨が長引いたりした場合に枝先の新しい葉を中心に多発する場合があります。発病が多くなると早期落葉の原因となりますので、9月



写真9 ブドウの葉に発生したべと病

に予防的に「Cボルドー66D等の無機銅剤を散布してください。」

なお、他県ではアミスター10フロアブルやストロビードライフロアブルなどのQO-剤で耐性菌の発生が確認されていますので、これらの剤を使用したにもかかわらず発生が多い圃場では他系統の薬剤を使用するようにしてください。

2 ブドウトラカミキリ

成虫の発生は8月下旬～9月中旬にかけて最も多くなるため、収穫後にスミチオン水和剤40を散布すると成虫の防除とともに幼虫の食入を防止する効果があります。

剪定枝や幼虫が食入して枯死した枝を圃場内や近辺に放置すると、これが発生源となる場合があるので、成虫の発生前に土中に埋没したり、

ビニール袋に入れたりするなど適正に処分してください。

● キウイフルーツ

1 果実軟腐病

この病害の感染時期は梅雨期と秋雨期です。病原菌が感染してもすぐには病徴を表すことがなく、果実表面に潜伏して貯蔵中に発病します。今後、台風通過による強風雨や長雨がある場合は多発が懸念されます。このような場合には、トップジンM水和剤を散布してください。また、除袋後、収穫前にロブラル水和剤を果実だけでなく樹全体にかかるように散布してください。